

CHALLENGER!



秋田市 佐藤 あゆみ（さとう あゆみ）さん
シェアキッチンの経営

「子どもが小さいから」「周りに反対されるから」「知識も経験も足りないし」。そんなふうに言い訳を探して、やりたいことに蓋をしてしまう人は少なくない。今回取材した「6坪カフェ」を運営する佐藤あゆみさんも、かつてはその一人だった。そんな佐藤さんがシェアキッチンを開業し、今ではチャレンジする人を応援する立場になって活躍している。なぜ佐藤さんは「動ける人」になれたのか。そして、スペースやキッチンを貸すだけではない「6坪カフェ」の魅力と、佐藤さんの人物像に迫った。

転機をもたらした「シェアキッチン」との出会い

佐藤さんが「シェアキッチン」の存在を知ったのは、コロナ禍で相次ぐ飲食店の閉店にやるせなさを感じていた頃、偶然テレビで目に留まったニュースがきっかけだった。シェアキッチンとは、複数の作り手が一つの調理場を共同で利用する仕組みのこと。初期費用や固定費を抑えられるため、都市部ではリスクの少ない開業・運営方法として注目されていた。

佐藤さんは、シェアキッチンが、単なる共同調理場ではなく、「やってみたい」という想いを形にするための、挑戦のハードルを下

げる支援の仕組みであることに衝撃を受けたという。「都会にはこんなものがあるのか！」という驚きと、『自分がやりたいのはこれだ！』という想いが一気に湧き上がった」と振り返る。

もともと食に関わる仕事をしてきた佐藤さんは、「いつか自分のカフェを持てたら」という憧れを抱いていた。しかし、そのニュースをきっかけに、自分が本当にやりたかったのは“自分自身が店を持つこと”ではなく、「挑戦したい」と願う人を支える環境を作ることだと気づいたのだ。

「諦める人を減らしたい！」 6坪カフェの伴走支援

痛みを役割に。
私だからこそできるサポート

佐藤さんが、チャレンジしたい人の背中を押す“伴走者”としてシェアキッチンを始めた背景には、自身の過去の経験がある。

家族と不仲で、やりたいことを口にするたびに親から反対されてきた佐藤さん。そのうち「自分にはできないんだ」と諦めることが増えていった。反対されると思うと本心を出すことも苦手になっていき、学校でも職場でも孤立しがちに——相談相手や背中を押してくれる人もいなかった。

「自分の苦い経験や心の変化が、誰かの悩みに寄り添う力になるかもしれない。」そんな想いが積み重なり、6坪カフェという場をつくる原動力となった。

ここでは安心して挑戦でき、前に進むきっかけを見つけられる。その想いが今も佐藤さんの支えになっている。



挑戦者の「一步目」が生まれる、こだわりのカフェ空間。

事業詳細

飲食店営業・菓子製造業・そうざい製造業の3つの許可が取得できるシェアキッチン。「自分のつくったものを届けたい」という想いを形にできる場所です。独立に向けた第一歩やイベント出店用の菓子製造、週末だけの営業、家庭や仕事と並行した複業など、幅広い挑戦を後押し。利用者同士の自然な会話やつながりも、魅力のひとつです。

店舗名 6坪カフェ 住所 秋田県秋田市四ツ小屋字下川原139-4 駐車場 有り
営業日 インスタの出店カレンダーに掲載 製造可能時間 3:00～22:00（完全予約制）



instagram

佐藤さんが応援してほしいこと！！

この場所を、必要としている人へ届けたい！

もしあなたの周りに、境遇や環境で悩んでいる人や、始め方がわからない人がいたら、「6坪カフェっていう場所があるよ」と、そっと教えて背中を押してあげてくださいね。



自家製ドライフラワー。店内随所に佐藤さんのセンスが光る。

場所貸しだけではないシェアキッチン「6坪カフェ」の支援

「6坪カフェ」の価値は、場所の提供にとどまらない。

たとえばマルシェに出店したくても、開催まで全てを一人でこなすのは大変だ。そこで佐藤さんは「出張6坪カフェ」という“お店”としてブースを確保。出店者はその中で“間借り”的に出店でき、商品づくりに専念できる。

また、日々の会話から出店者のニーズをくみ取るのも佐藤さんの役目。要望に対して必要だと思えば試し、不要ならやめる——そんな柔軟さで出店者の「やりたい」を支えている。

オープンから2年、挑戦を終え自分の工房を持つ人も現れた。佐藤さんは彼らを「卒業生」と呼び、「卒業生が秋田にあふれたら嬉しい」と微笑む。

挑戦から逃げた過去を持つ佐藤さんだからこそ作られた「諦めなくていい」温かい場所だ。